

賈島の文学

松 本 肇

一 はじめに

賈島（七七九—八四三）、字は浪仙、范陽（河北省北京市）の人である。先祖のひとりに、漢の賈誼がいる。二十歳の頃、僧侶となり、無本と名乗った。元和六年（八一二）、三十三歳のとき、洛陽で初めて韓愈に面会する。この韓愈に詩才を認められて、僧侶を辞め、詩作に没頭するようになる。科擧の試験を何度も受験するが、けっきょく合格しなかった。開成二年（八三七）、五十九歳のとき、遂州長江県（四川省蓬溪県）の主簿を授かる。開成五年（八四〇）、六十二歳のとき、任期満了とともに、普州（四川省安岳県）の司倉參軍に転任し、会昌三年（八四三）、六十五歳で死ぬ。死後、普州司戸參軍に転任の知らせが届いた。

僧籍を離れてから、科擧の試験に落第を続け、官僚としてめざましい活躍をしたわけではない。賈島にとって、生きるということはどういうことだったのか。以下で、賈島の文学について考察する¹。

二 ひとつの自画像

賈島に「鷺鷥」(卷八)と題する詩がある。しらさぎを詠じた寓言詩である。

求魚未得食 魚を求めて未だ食するを得ず

沙岸往来行 沙岸 往来して行く

島月独棲影 島月 独り棲む影

暮天寒過声 暮天 寒きに過る声

墮巢因木折 巢より墮つるは木の折るるに因り

失侶遇弦驚 侶を失うは弦の驚かすに遇えばなり

頻向煙霄望 頻りに煙霄に向かいて望む

吾知爾去程 吾は爾の去程を知る

この詩は第一・二句で、餌を手に入れることができず、砂浜をうろつくしらさぎの姿を詠じている。ここには、科擧の試験に合格できず、有力者の庇護を求めて奔走する賈島自身の姿が投影されているだろう。科擧の受験生が、官界へのつてを求め、有力者に詩文を献上して自分を売り込むのは、当時の風習になっていた。長慶元年(八二二)、賈島が四十三歳のとき、翰林承旨學士元稹に引き立てを願う「贈翰林」(卷十)では、「応憐独向名場苦、曾十余年浪過春」と、十年以上も科擧に合格できない窮状を訴えている。第三・四句は、仲間のいない孤独なしらさぎを詠じるもので、孤立無援の状態を暗示している。第五・六句は、孤独な状態に置かれた理由について述べる。木が折れたために巢から転落したというのは、長慶四年(八二四)、四十六歳のときに、賈島の才能を認めてくれた韓愈が死んだことを指しているかも知れない。弓のつるで脅かされただけで仲間を失った、つまり、

弓を射る格好をただだけで仲間が射落とされたというのは、何か屈辱的な出来事を暗示しているのだろう。第七・八句では、もやにかすんだ大空を見上げるしらさぎの姿を詠じる。しらさぎは、賈島の自画像である。もやにかすんだ大空も、いつかはきつと晴れる。ここには、たとえくじけても望みを捨てない賈島の不屈の精神がこめられている。賈島は、私にはしらさぎの行方が分かるという。それでは、しらさぎⅡ賈島はいつどこへ行こうとしているのだろうか。これから、そのあとを追跡してみることになろう。

三 廃墟の美

賈島は、中唐の詩人である。中唐期には、盛唐期のような雄大な気象は失われたが、新しい美意識や価値観が生まれた。「泥陽館」(巻五)と題する詩を見てみよう。

客愁何併起	客愁	何ぞ併せ起こる
暮送故人回	暮に故人の	回るを送る
廢館秋螢出	廢館	秋螢出で
空城寒雨来	空城	寒雨来る
夕陽飄白露	夕陽	白露を翻し
樹影掃青苔	樹影	青苔を掃う
独坐離容慘	独坐	離容慘たり
孤燈照不開	孤燈	照らせども開かず

この詩は、旅の途中に泊まった廃墟で、友人を送別した詩である。第一・二句は、異郷で友人に出会い、夕方

別れたことをいう。友人は故郷に帰るのである。故郷に帰る友人を見送って、離別の悲しみとともに、旅愁がわき起こった。第三、四句は、友人のいなくなった廢墟の光景を描いている。第三句の「廢館」、第四句の「空城」は、友人の不在を強調する。第五句の「白露」は、『礼記』月令第六の「孟秋之月」の記事に、「涼風至、白露降」とある通り、初秋の風物なので、第三句の「秋螢」と対応している。また、第四句の「雨」と第五句の「露」は縁語である。第五、六句は、ともに擬人法を用いながら、光と影、天と地の対比に色彩を融合させて、絵画的な美しさを作り出している。第七、八句は、ひとりぼっちで夜を過すようすを描く。第二句に対応するもので、「独坐」「孤燈」にこめられた孤独感は、「廢館」「空城」にこめられた不在の感覚と連鎖している。

泥陽は、三国時代の魏の都市で、長安の北にあった。唐代にはこの地名はすでになく、華原県の一部となっていた。泥陽館は、旅館の名前であろう。賈島が泊まったときには無人の廢墟と化していた。あるいは、旅館を廃業してあばら家ようになった民家に宿を取ったのかも知れない。いずれにしても、唐代には失われた地名を用いることで、友人の去った後の喪失感が増幅される。

この詩は、作者のほかには誰もいないということを繰り返して歌う。「秋螢出」「寒雨来」というのは、友と別れた作者の相手はほたと雨ばかりという意味で、孤独を表現している。青い苔が生えているのは、訪れる人の足跡がないということにほかならない。だが、孤独であるということは、それほど悪いことなのだろうか。

聞一多は、『唐詩雜論』(『聞一多全集』三、開明書店、一九四八)に収められた「賈島」の中で、賈島が文芸における「休息」の意義をはじめて発見したことを指摘している。聞一多によれば、初唐の豪華、盛唐の壯麗、大曆十才子の華美に人々は飽き、幻滅を感じていた。多年の熱情と感傷の中で、人々の感情は疲れ、休息を求めている。そのようなときに現われたのが賈島だった。休息することによって疲労を取り除き、氣力を回復し、次の緊張に対処することができるという。これは卓見だと思ふ。スローライフの意義が見直されている今日にあっても、充分にうなずける。がんばりすぎて疲れたときには、休めばよい。そして、荒涼とした廢墟ほど、休息に適した場所があるだろうか。

賈島が廢墟となった泥陽館に泊まったのは、おそらく偶然ではない。元和七年（八二二）、三十四歳のとき、賈島は長安の延寿里に住んだことがあり、「延寿里精舍寓居」（卷一）の中で、「旅託避華館、荒樓遂愚慚」と述べている。荒れた住まいは愚かで凡庸な私にぴったりだと言つて、華麗な建物を避けている。長慶三年（八二三）、四十五歳で、長安の昇道坊に住んだときにも、「荒齋」（卷四）と題する詩の中で、「樸愚猶本性、不是学忘機」と述べている。どちらにも、「愚」ということばを用いていることに注意しよう。李嘉言「賈島年譜」によれば、昇道坊は樂遊園の東にあつた。樂遊園は、樂遊原と同じである。この樂遊原について、植木久行「唐都長安樂遊原詩考——樂遊原の位置とそのイメージ——」（『中国詩文論叢』第六集、一九八七）は、次のように述べている。

安史の乱がおこる以前の唐前半期、樂遊原は三月三日の上巳節や九月九日の重陽節になると、盛大なにぎわいぶりをみせた。しかし平素は、住民の少ない、野草や樹木の生い茂る荒地であり、とくに墓地の多い廢墟であつた。

植木氏は、右の論文で、賈島の詩風を形成する要因のひとつとして、樂遊原の存在を指摘する。賈島は、樂遊原が廢墟だったからこそ、そこに住んだのではなからうか。賈島が荒廢した住まいを選んだ理由は、内面的な欲求に基づいている。美意識の反映と言つてもよい。

廢墟と化した泥陽館は、賈島の美意識を刺激した。夕陽の中に、白い露の玉が舞うようすなど、充分に幻想的である。

ここで、中国文学における廢墟の意義について触れておく。⁴『佩文韻府』に基づいて、唐代までの廢墟を表わす詩語を時代順に並べると、次のようになる。

○六朝時代

①「廢邑」空村余拱木、廢邑有頽城。

(出典) 沈炯「長安還至方山愴然自傷」(遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』陳詩卷一、中華書局、一九

八三)

○盛唐

②「廢井」荒庭衰草徧、廢井蒼苔積。

(出典) 李白「姑孰十詠」謝公宅(『李太白全集』卷二十二)

○中唐

③「廢渠」雨水洗荒竹、溪沙填廢渠。

(出典) 王建「縣丞厅即事」(『全唐詩』卷一九九)

④「廢寺」石路無人掃、松門被火燒。

(出典) 顧況「經廢寺」(『全唐詩』卷二六六)

⑤「廢塔」廢塔巢双鶴、長波漾白鷗。

(出典) 戴叔倫「崇德道中」(『全唐詩』卷二七三)⁵⁾

⑥「廢戍」廢戍山煙出、荒田野火行。

(出典) 劉長卿「奉使至申州傷經陷沒」(『劉隨州詩集』卷二)

⑦ 「廢館」 廢館秋螢出、空城寒雨來。

〔出典〕 賈島「泥陽館」〔唐賈浪仙長江集〕卷五)

○晚唐

⑧ 「廢棧」 廢棧豕埽欄、広場雞啄粟。

〔出典〕 温庭筠「燒歌」〔温庭筠詩集〕卷三)

⑨ 「廢砌」 廢砌翳薜荔、枯荷無菰蒲。

〔出典〕 温庭筠「題賀知章故居疊韻作」〔温庭筠詩集〕別集)

⑩ 「廢泉」 雞頭竹上開危徑、鴨脚花中撻廢泉。

〔出典〕 皮日休「題支山南峰僧」〔全唐詩〕卷六一四)

これを見ると、中唐以後になつて、廢墟の用例が豊富になることが分かる。このうち、①⑥は戦亂を傷む詩で、廢墟自体を詠じることが目的とは言えないかも知れない。それにしても、廢墟への強い関心がなければ、これらの詩は生まれなかつたことも確かであろう。そして、中唐以後に廢墟の用例が増加することは、開一多の指摘する「休息」の願望と無縁ではないように思われる。まったく人の氣配のない静謐な空間は、鬭争に疲れた人々の心を癒したことであろう。

齊文榜『賈島集校注』前言は、賈島の詩には語つたり笑つたりする姿があまり見られない、と述べている。静かな環境を愛するのは、賈島の性格から来るものだろう。「齋中」(卷一)では、「耽静非謬為、本性実疏索」、⁵⁾「題長江」(卷五)では、「言心俱好静、靡暑落暉空」と歌う。賈島は、幽静の美の発見者でもあつた。宋の王安石が、「諒無与歌絃、幽独亦可喜」(「散髮一扁舟」)、「臨川先生文集」卷八)、「晴日暖風生麦氣、綠陰幽草勝花時」(「初

夏即事」、同卷二十七）のように幽静の美を詠じるのも、賈島の詩風を昇華した結果と言えるかも知れない。幽静の美を愛する賈島にとって、廢墟は最も理想的な空間であった。

四 病氣の蟬

賈島の生きた中唐は、ものごとの価値観が変化した時代だった。廢墟の美の発見も、そのような時代の動向を反映しているだろう。人々の認識が変われば、恐怖の対象も快樂に変わる。望ましくないと見なされていたものに、価値が認められるようになる。王毅『園林与中国文化』（上海人民出版社、一九九〇）によると、中唐以後、白居易の登場によって、懶と病が士大夫の人格のシンボルになった（第七編第二章「懶与病」）。このような文化現象も、背景に「休息」の願望があったと考えると、理解しやすい。ここでは、賈島の「病蟬」（卷六）について考察する。

病蟬飛不得	病蟬	飛ぶこと得ず
向我掌中行	我が掌中	に向て行く
拆翼猶能薄	拆翼	猶お能く薄り
酸吟尚極清	酸吟	尚お極めて清し
露華凝在腹	露華	凝りて腹に在り
塵点誤侵睛	塵点	誤りて睛を侵す
黄雀并鶻鳥	黄雀と鶻鳥	と
俱懷害爾情	俱に爾を害する情	を懷く

この詩は第一・二句で、てのひらに乗った、飛べない病気の蟬を描く。第三・四句で、この蟬は、羽が折れても動いて前に進むことはでき、悲しい声で鳴いても清々しい、と述べている。飛べない蟬にも、頑強な力と高潔な志が存することをいう。第五・六句は、蟬の腹に露がこびりつき、蟬の眼にごみが入った、と述べている。蟬が苦しい境遇に追いこまれたことをいう。第七・八句は、黄雀とどびが蟬を捕まえようと狙っている、と歌う。蟬に危険が迫っていることを警告したのである。

病気の蟬は、賈島の自画像であろう。飛ぼうとしても飛べず、多くの敵に囲まれている。黄雀とどびは、悪人のたとえ。最後の二句は、『説苑』卷九・正諫の次のような故事に基づく。庭の木にとまって露を飲んでる蟬は、かまきりが後ろにいるのに気づかない。蟬を捕らうと狙っているかまきりは、黄雀がそばにいるのに気づかない。かまきりを食べようと狙っている黄雀は、下ではじき弓を持った少年が狙っているのに気づかない。この話は、呉王が荆（楚の別名）を攻撃しようとするのを諫めたたとえ話で、目先の利益にとらわれて、背後の危険を顧みない愚かさを諷刺している。同じような話が、『莊子』山木第二十にもあり、真の己を忘れることを戒めている。賈島は、自分を病気の蟬になぞらえて、困難な境遇の中で、己を見失わずに生きていくことのたいせつさを教えている。

元の方回『瀛奎律髓』卷二十七・着題類は、賈島「病蟬」の批評で、賈島が杜甫に学んだことを指摘しながら、「塵点誤侵睛」の獨創性を讃えている。そもそも、病気の動物や植物の名前を詩題に用いた例は、唐代以前にはなく、杜甫の「病柏」（『杜詩詳註』卷十）、「病橘」（同卷十）が最初の例である。これは、病気の植物の名前を用いており、動物の例では、錢起「病鶴篇」（『錢考功集』卷三）を挙げることができる。賈島には「病蟬」のほかに、「病鶻吟」（卷十）と題する詩もある。「病鶻」は、杜甫「呀鶻行」（『杜詩詳註』卷二十二）に「病鶻孤飛俗眼醜、每夜江辺宿衰柳」と見える。賈島が杜甫を継承していることは明らかである。

方回が「塵点誤侵睛」に獨創性を認めたとように、「病蟬」の第五・六句は、賈島の独壇場と言ってもよい。微少な世界に視線を注ぐのは、中唐詩人の特色である。その中でも、露が蟬の腹にこびりつき、ごみが蟬の眼につ

いている、というようなきわめて細かい描写は、注目に値する。そして、微少な世界を描いた先駆者が、杜甫だつた。

仰蜂粘落絮 仰蜂 落絮粘り

行蟻上枯梨 行蟻 枯梨に上る（「独酌」、『杜詩詳註』卷十）

上を向いた蜂の頭に柳の花が落ちて粘り着き、行列を作った蟻が梨の枯木に上っていく、と歌う。

芹泥随燕菊 芹泥 燕菊に随い

蕊粉上蜂鬚 蕊粉 蜂鬚に上る（「徐歩」、同卷十）

せりの泥を燕がくちばしでくわえ、花粉が蜂のひげに乗っている、と歌う。この二例を見ると、蜂の頭に柳の花が付着している、蜂のひげに花粉がついている、というような微少な世界の描写が、賈島の詩に影響を与えたことは間違いない。

『唐詩紀事』卷四十によると、賈島は長いこと科挙に合格しなかったので、病蟬の句を吟じて高官を非難したのだという。科挙に合格することは、賈島の長年の夢だったが、けつきよく合格しなかった。官僚としても成功しなかった。それでは、賈島にとって、意義のある人生とは何だったのだろうか。

五 詩人の生活

賈島と並び称された詩人に、孟郊がいる。胡適『白話文学史』（岳麓書社、一九八六）は、孟郊について論じ

た文章の中で、杜甫以後、詩を作ることが詩人の第二の生命となった、と述べている（第十五章）。貴人を樂しませる玩具でも、科擧を受験するために道具でもなく、詩を作ることで自体に価値が認められるようになった、ということがある。詩人として生きることが、人生の目標になった。そして、賈島が望んだのもまた、詩人として生きていくことだったのである。詩人の生活こそ、不遇な人生の中で見出した活路にほかならなかった。賈島はまた、「推敲」の故事で知られる。詩作に没頭する風潮が、中晩唐に顕著になる傾向は、詩作に人生の意義を認める価値観の反映である。

賈島は「戲贈友人」（巻二）で、詩作に熱中するようすを次のように歌う。

一日不作詩 一日詩を作らざれば

心源如磨井 心源 磨井のごとし

筆硯為轆轤 筆硯は轆轤と為り

吟詠作縻綆 吟詠は縻綆と作る

朝來重汲引 朝來 重ねて汲引すれば

依旧得清冷 旧に依りて清冷を得たり

書贈同懷人 書して同懷の人に贈る

詞中多苦辛 詞中 苦辛多し

この詩は、井戸水の比喩を用いて、創作の苦心を述べている。第一・二句は、心を井戸にたとえて、詩作が一日も欠かせないことをいう。第三・四句は、詩作することを、なわをつけたろくろで井戸から水を汲み上げるようにたとえる。第五・六句は、毎日新しい詩を作ることを、毎朝井戸から新鮮な水を汲むようにたとえる。第七・八句は、苦心して詩を創作することをいう。

創作の苦心はまた、創作の喜びであった。買島は詩を作りたくて仕方なかった。「病起」(巻六)では、「病令新作少、雨阻故人来」、病氣になると新しい詩が作れない、とまで嘆いている。買島にとって、詩を作ることは生きていく証だった。

「荒井健」「寒瘦詩人買島」(『秋風鬼雨——詩に呪われた詩人たち』、筑摩書房、一九八二)は、買島が特定の題材に執着することを指摘しながら、せみとこおろぎばかり詠じている、という王香毓氏の説を紹介する。買島が、せみとこおろぎのような特定の題材にこだわるのは、職業詩人としての自覚が固まったことを示す。流行作家が独自のパターンを生み出すようなものである。パターンが固定すると、それがトレードマークとなり、時にはマンネリ化を指摘される。マンネリ化が指摘されるのは、流行作家の宿命と言えるかも知れない。「せみとこおろぎ」が、買島のトレードマークとして認められたとすれば、それは、職業詩人として成功したことを意味する。「郊寒島瘦」は、宋の蘇軾が「祭柳子玉文」(『蘇軾文集』巻六十三、中華書局、一九八六)の中で、孟郊と買島の詩風を批評したことはある。蘇軾はなぜ、買島の詩の特色を「瘦」ということばで表わしたのであるか。買島と「瘦」が結びつく理由を考えてみよう。ここで、孟郊の「戲贈無本二首」其二(『孟東野詩集』巻六)を引く。

長安秋声乾	長安	秋声乾き
木葉相号悲	木葉	相号悲す
瘦僧臥冰凌	瘦僧	冰凌に臥し
嘲詠含金痕	嘲詠	金痕を含む
金痕非戰痕	金痕	戰痕に非ず
峭病方在茲	峭病	方に茲に在り
詩骨聳東野	詩骨	東野(孟郊)より聳え

詩瀟湧退之 詩瀟 退之（韓愈）より湧く
 有時踉蹌行 時に踉蹌として行く有らば
 人驚鶴阿師 人は鶴阿師かと驚く
 可惜李杜死 惜しむべし 李杜死して
 不見此狂癡 此の狂癡を見ず

この詩は前半六句で、無本、つまり賈島が詩作に熱中するようすを描く。瘦せた僧侶が氷の上に横たわり、詩を吟じて口に刀傷が出来た、というのは、苦吟するようすを述べたものである。後半六句は、賈島と、孟郊・韓愈・李白・杜甫を比較しながら、その詩風を讃える。よろよろ歩く姿を鶴にたとえたのは、瘦せているのをからかったのである。孟郊は賈島を「瘦僧」と呼ぶ。賈島は「和劉涵」（卷二）で、「新題驚我瘦、窺鏡見醜顔」、詩を書くときと瘦せる、と言う。姚合「別賈島」（『姚少監詩集』卷二）でも、賈島が瘦せていることを「野客狂無過、詩仙瘦始真」と言っている。賈島が瘦せているのは、口を傷つけるまでの苦吟のためである。『雲仙雜記』卷六・吟詩落齒によると、謝靈運は半日に百篇の詩を吟じて、十二本の歯が抜けたという。苦吟は人体を痛めつける。

李白は「戲贈杜甫」（『李太白全集』卷三十）で、次のように歌う。

飯顆山頭逢杜甫 飯顆山頭 杜甫に逢う
 頭戴笠子日卓午 頭に笠子を戴き 日は卓午なり
 借問別來太瘦生 借問す 別來ただ瘦せたり
 總為徒前作詩苦 總て徒前作詩の苦しみの為ならん

この詩は、『本事詩』高逸第三に載っている。杜甫が規則の細かい近体詩に精力を注いだのを、李白がからかったのだという。李白は、古体詩が得意だった。杜甫が痩せている理由は、作詩の苦しみのためという指摘に注目しよう。杜甫は、苦吟派の詩人の元祖だった。

孟郊が買島を「瘦僧」と呼んだのは、買島の文学に対する最大級の賛辞だった。孟郊は、買島を杜甫に匹敵する詩人と見なしたのである。そして、蘇軾が、買島は痩せている、と言ったのも、同じような意味ではなからうか。蘇軾は、買島を杜甫に匹敵するほどの苦吟派の詩人として高く評価したのである。

『雲仙雜記』巻四・祭詩以酒脯によると、買島は大みそかに、一年間で作った詩を取り出して、酒と干し肉で祭り、「勞吾精神、以是補之。」と唱えた。詩作に全精神を注いだのを慰労したのである。杜甫もまた、詩作に全精神を注いだ。杜甫は、「江上值水如海勢聊短述」(『杜詩詳註』巻十)で書いている。

為人性僻耽佳句 人となり 性僻にして佳句に耽る

語不驚人死不休 語人を驚かさずば 死すとも休まず

この句は、杜甫の詩作への没頭をよく示している。死を賭するほどの詩作への情熱は、苦吟派の元祖にふさわしい。李嘉言は、杜甫の右の句について、買島に対する予言的評論のようだと述べている。¹⁴

蘇軾の「鳥瘦」という批評は、買島が杜甫のように、世界を驚かす言葉の創造者であることを指摘したものと
言ってもよい。

六 おわりに

宋の歐陽修は、『六一詩話』の中で、旅のつらさを表現した名句のひとつに、買島「暮過山村」(巻八)の「怪

禽啼曠野、落日恐行人」を挙げている。試みに、全体を掲げてみよう。

数里聞寒水	数里	寒水を聞き
山家少四隣	山家	四隣少なし
怪禽啼曠野	怪禽	曠野に啼き
落日恐行人	落日	行人を恐れしむ
初月未終夕	初月	未だ夕を終えず
辺烽不過秦	辺烽	秦を過ぎず
蕭条桑柘外	蕭条たり	桑柘の外
煙火漸相親	煙火	漸く相親しむ

この詩は、前半で辺境地帯を行く旅人の不安な心理を描き、後半で不安が徐々に安心に変わるようすを描いている。旅人は、速くに炊事の火を見つけてほっとする。この詩は、くじけても望みを捨てないことを述べた「鷺鷥」と似ている。闇の中で燃えている火、それは、賈島が旅の終わりに見つけた「詩人」という名の灯火であった、と言ったら言い過ぎになるだろうか。

注

(1) テキストは、四部叢刊本「唐賈浪仙長江集」を用いる。賈島の詩の解釈には、劉斯翰「孟郊賈島詩選」(三聯書店香港分店、一九八六)、齊文榜「賈島集校注」(人民文学出版社、二〇〇二)、黄鵬「賈島詩集箋注」(巴蜀書社、二〇〇二)、李建崑「賈島詩集校注」(里仁書局、二〇〇二)を参照した。ほかに、李嘉言「長江集新校」(上海古籍出版社、一九八三)の付録に収められた「賈島年譜」を参照した。

- (2) 富永一登「狐」を用いた文学言語の展開——陶淵明に至るまで——〔未名〕二十二号、二〇〇四〕は、陶淵明の詩を対象に、自己を充実させる孤独について論じている。
- (3) 姚合「寄賈島浪仙」〔姚少監詩集〕卷四)でも、賈島の住居について、「所居率荒野、寧似在京邑」という。
- (4) 谷川渥編『廢墟大全』(中公文庫、二〇〇三)に、中野美代子「ピラネージなき中国——紙上の楼閣から廢屋まで——」が収められていて、「中国には、表象としての廢墟は、ない」と述べている。廢墟に関しては、ほかに、谷川渥『廢墟の美学』(集英社新書、二〇〇三)、クリストファー・ウッドワード著・森夏樹訳『廢墟論』(青土社、二〇〇三)を参照。
- (5) 蔣寅『戴叔倫詩集校注』(上海古籍出版社、一九九三)によると、この詩は、明の張以寧『翠屏集』卷二に見える作品で、偽作という(二七四頁)。
- (6) 齊文榜『賈島集校注』は、「題長江」の注(二)で、賈島の「好静」を儒教と仏教の両面から説明している。また、黄鵬『賈島詩集箋注』は、「題長江」の注②で、「好静」が賈島の性情を最もよく体現すると言い、静の価値を詠じた例として、杜甫「寄張十二山人彪三十韻」〔杜詩詳註〕卷八)の「静者心多妙、先生雲絶倫」を挙げている。
- (7) 川合康三「蟬の詩に見る詩の転変」〔中国のアルバ——系譜の詩学』、汲古書院、二〇〇三)によれば、高潔さを備えているとともに、虐げられる弱者であるという蟬の形象は、曹植の「蟬賦」〔曹集詮評〕卷三)にすでに先例がある。
- (8) 賈浪仙詩得老杜之瘦而用意苦矣。蟬有何病。殆偶見之、託物寄情、喻寒士不遇也。中四句極其奇澁、而「塵点誤侵晴」尤亘古詩人所未道、故曰浪仙用意苦矣。
- (9) 李嘉言『長江集新校』前言三(上海古籍出版社、一九八三)でも、賈島が杜甫の精神を継承していることを指摘する。
- (10) 馬承五「中唐苦吟詩人綜論」〔文学遺產〕一九八八年第二期)によると、中唐の詩人たちは、自然界の細部と小物体を詩歌の表現対象とすることによって、精神上の満足と心理上の平衡を得たのだという。
- (11) 「推敲」の故事については、静永健「賈島「推敲」考」〔中国文学論集〕第二十九号、二〇〇〇)を参照。
- (12) 岡田充博氏は、中晚唐における詩文学への没頭的風潮について考察した論文の中で、(一)詩文学が読書人層の文学的関心を独占する位置にまで上昇したこと、(二)詩文学に没頭する創作態度そのものが詩の素材になりうると自覚されるようになったこと、(三)皎然「詩式」のような、苦吟の重要性を主張する文学論が現われてきたこと、をこの時期の特質として指摘する。「中晚唐期に見られる詩文学への没頭的風潮について——詩人達の文学的自覚の問題を中心として——」〔名古屋大学文学部研究論集〕文学二十六、一九八〇)を参照。

(13) 芦立一郎「賈島詩試探」(『山形大学紀要(人文科学)』第十三卷第一号、一九九四)は、「戲贈友人」について、「詩作によって生が支えられることを歌うが、それが、詩作のほうにこそ生活の真実が存在するのだという、常識的には逆転した発想にいたるまでにはさほどの距離はなからう」と述べている。

(14) 注(9)と同じ。なお、「鑑識録」巻八・賈作旨は、賈島が牛肉を食べ、病気になって死んだ、と記す。この記事は、「杜甫の「牛肉白酒」の終焉説話を想起させる。賈島と杜甫の共通性が、同じような終焉説話を生んだのだろうか。「牛肉白酒」の終焉説話については、松浦友久「李白伝記論——客寓の詩想——」三九八頁(研文出版、一九九四)を参照。

〔付記〕本稿は、平成十七年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)「唐代における悲愁の文学」の研究成果である。